

一 西庄Ⅱ遺跡の中世遺物組成

北野隆亮 KITANO Ryusuke

はじめに

紀伊半島北部の太平洋沿岸地域における中世城館のうち、埋蔵文化財発掘調査が行われた遺跡は、太田城跡（太田・黒田遺跡）、西庄Ⅱ遺跡、中野城跡（中野遺跡）、木本城跡（城山遺跡）などがある（図1）^①。

これらの遺跡のうち、太田城跡の遺物組成を検討した研究がある^②。研究の方法は、出土遺物を観察することにより、各破片単位で種類を識別し分類を行い、種類別に破片数を集計し、それぞれの組成比率を導くことで遺物群の特徴抽出を試みたものである。同様の方法を用いて実施することにより、離れて立地する遺跡の比較を行うことが可能となる^③。

紀伊半島北部における中世城館の様相を知るため、沿岸地域のなかでも最も海に近い西庄Ⅱ遺跡を取り上げ、中世土器・陶磁器の種類別の破片数集計調査を行った。

西庄Ⅱ遺跡は埋蔵文化財発掘調査が行われ、中世から近世（十一世紀後半～十八世紀代）の長期に渡り、屋敷地遺構が存続したことが知られる遺跡である^④。

なお、発掘調査における西庄Ⅱ遺跡出土遺物は、和歌山県教育委員会の所管であり、和歌山県の収蔵施設において収蔵・管理されている。また、資料の一部は、和歌山県立紀伊風土記の丘及び和歌山県立博物館において展示・保管されている^⑤。

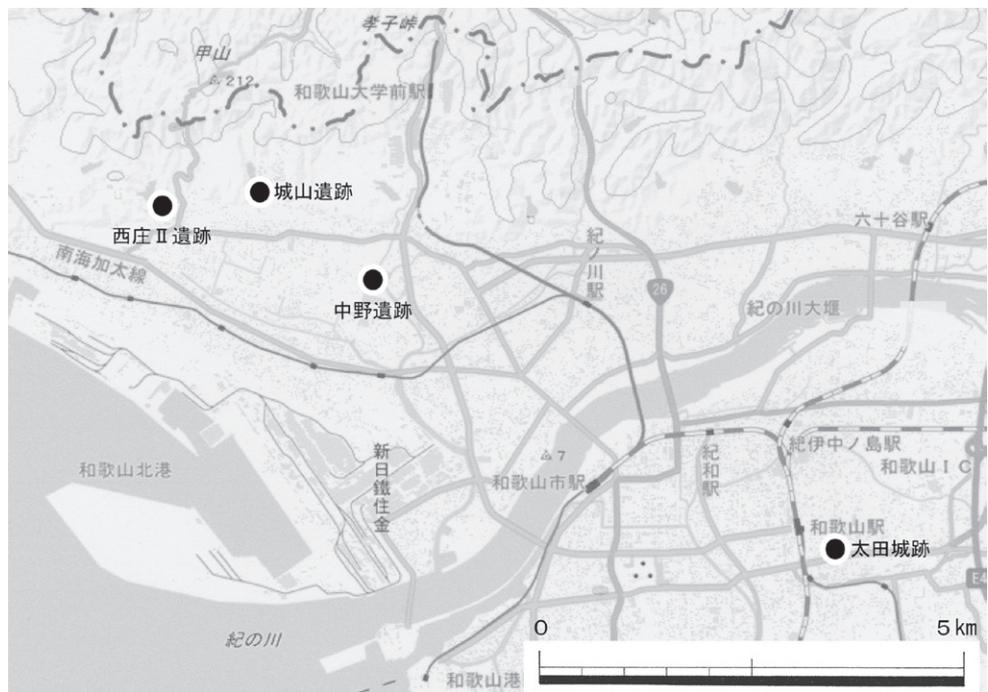


図1 西庄Ⅱ遺跡周辺の発掘調査された中世城館位置図

一 西庄Ⅱ遺跡の位置と環境

西庄Ⅱ遺跡は紀ノ川右岸の扇状地端部に立地する遺跡で、一九七七年に行われた発掘調査の結果、中世城館の遺構が検出された。遺跡は東西

二八〇m、南北二〇〇〜二五〇m、面積約六万㎡の範囲がマークされている⁶⁾。

遺跡は、和泉山脈から南に派生する尾根の先端部分の高台に築かれており、紀ノ川河口部の和歌山平野とその沿岸部を広く眺望することができる。遺跡の東西は小規模な谷に分断された地形となっており、東側の谷を越えた地点から北に大阪府岬町多奈川に至る猿坂峠越えの道を通じる。周囲の中世遺跡は、本遺跡を挟み丘陵裾に東西に連なるように分布している。

西庄Ⅱ遺跡の位置は、平安時代から戦国時代に当地に存在した海部郡木本荘の範囲に当たる。木本荘は、康和二年(一一〇〇)七月二十三日付の東大寺政所下文案に「別院崇敬寺所領紀伊国木本庄」とあるのが初見とされ、東大寺末寺崇敬寺(現奈良県桜井市安倍寺)領として一一世紀半ば頃から寺家の指導で開発が始められ、当時一〇〇町歩余の耕地を有する荘園であったと考えられている。しかし、寺家による荘園成立の初期に国司による収公を受けたことを契機に当荘関係文書が流出し、村上源氏の一族とされる有雄丸に文書と荘園が譲渡された。その後、有雄丸とその父源有政らは東大寺・崇敬寺と当荘の支配権をめぐって対立し、当荘内で武力衝突を起こしたとされる。長治元年(一一〇四)七月二十日付の東大寺八幡宮所司申状案に崇敬寺が当荘の年貢の一部を分けて東大寺鎮守八幡宮に寄進したとみえ、これにより崇敬寺は東大寺に加えて八幡宮の宗教的権威を利用して源有政らに対抗したとされ、対立は続いた。天永二年(一一一一)寺家は使を派遣し荘園四至内の検注を行い、同年九月八日付で木本荘検田目録注進状を作成した。それによれば、現作田七五町五反二四〇町歩で得田七〇町五反など内訳が記されるが、案主田と職事が西分と東分に二分されており、後に当荘が西荘と東荘に別れてみえることに対応するとされる。また、西分が先に記されることから当荘の中心が西分にあつたと推定されている⁷⁾。

鎌倉時代には、当地に木本氏と呼ばれる武士がおり、湯浅党の構成員となっていた。湯浅党としての結番体制を定めた文書「嘉禎四年(一二三八)結番定文」に木本左衛門尉宗時の名がみえる。また、湯浅党の諸氏を所領ごとに把握し、番に結んでいる文書「正応二年(一二八九)結番定文」には、一四番に「木本東庄」、続く一五番に「同西庄」がみえる。この一族は、代々源氏を称しており、源有政ら私領主親子が在地に支配基盤を築くことに成功することによって土着し、やがて木本氏として在地領主化したと考えられている⁸⁾。そうして木本氏は、木本荘の開発領主として、東大寺を本所と仰ぎ、自らは地頭として荘園の管理に当たっていたとされる。その後、木本氏は鎌倉時代末期の元弘の乱(一一三三)に参加し、和泉国熊取荘の地頭職を獲得した。元弘三年(一一三三)三、後醍醐天皇による建武の新政が始まると、北条氏残党の反乱が全国で引き起こされ、紀伊においても、建武元年(一一三三)に六十谷定尚が飯盛山に城を築き挙兵した。追討軍は、紀伊・河内・和泉より動員され、木本氏は木本宗元が足利氏の部将斯波高経に属して参加している⁹⁾。

戦国時代の和歌山平野は、雑賀荘を中心とした惣的結合がみられることから、雑賀五組(雑賀荘・中郷・十ヶ郷・三上郷・社家郷)などと呼ばれており、いわゆる惣国を形成していたと考えられている。雑賀惣国は「永祿五年(一五六二)七月吉日湯河直春起請文」の宛所に記された構成員から、和歌山平野を中心とした名草郡と沿岸部の海部郡の一部を占める広大な範囲であり、十ヶ郷に木本源内大夫の名前がみえることから、木本氏は雑賀惣国の構成員となっていたことがわかる¹⁰⁾。

二 西庄Ⅱ遺跡の中世城館

西庄Ⅱ遺跡は、一九七八年度に宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査が



図2 西庄Ⅱ遺跡検出の中世城館遺構全体平面図

行われ、遺跡中心部の約三〇〇〇㎡（第Ⅰ地区）で、中世から近世（十一世紀後半～十八世紀代）の長期に渡る屋敷地遺構が存続したことがあきらかにされた。

中世の遺構は東西と南北方向の幅約二m、深さ約一mの溝で長方形に区画されており、東西に長い区画二単位（北区画・南区画）と、その東に隣接する南北に長い区画一単位（東区画）が調査された。これらの区画は調査前の水田区画の形状とほぼ一致することから、南に未調査の東西に長い区画一単位が存在し、合計四単位の区画がセットになっていたと推定された（図2）。

一区画の規模は、北区画は東西五四m、南北二四m、南区画は東西四八m、南北二四mを測る。東区画については区画全体の調査は行われていないが、南北四〇m以上、東西一八m以上が確認された。以上のことから、一区画はおおむね長辺約五〇m、短辺約二四mの規模を測るとみられ、長辺は半町規模、短辺がその半分の長さに対応するものと考えられる。区画内には掘立柱建物、石組井戸、土坑、埋甕、区画溝、柵などが検出された。

掘立柱建物は二〇棟以上検出されたが、北区画と南区画を二分する東西方向大溝に平行・直交する棟方向のもの、南北方向の東溝と同方向か近似する棟方向のもの、北区画と南区画の区画内にみられる小規模の溝に沿った棟方向のもの三グループに分類された。東西方向大溝は二期あり、当初は二箇所を橋を架けていたとみられ、その後改修して橋を架けるための張り出し部を同じ場所二箇所に設けたと考えられている。

また、東西方向大溝が埋められた後に西方方向に軸が傾く小規模の溝を掘削している。中世城館の遺構は、区画内の施設や区画溝の変遷から三期に区分された。

第一期の遺構に伴う遺物は、中国製陶磁器、国産陶器、土師器、瓦器、東播系須恵器などが報告されている。中国製陶磁器（青磁、白

表2 西庄Ⅱ遺跡の中世土器・陶磁器 用途・器形別破片数集計表

用途	器形	種類	破片数	器形別小計	用途別集計
食膳具	椀	瓦器	2914	3138	10027
		山茶椀	3		
		中世土師器	20		
		瀬戸美濃系	51		
		白磁	21		
		青磁	108		
		染付	21		
	皿	瓦器	87	6849	
		土師器	6642		
		瀬戸美濃系	31		
		中国製白磁	40		
		中国製青磁	22		
		中国製染付	26		
		朝鮮製白磁	1		
		朝鮮製褐釉	1		
	小杯	瀬戸美濃系	1	7	
		中国製白磁	6		
	盤・鉢	瀬戸美濃系	2	11	
		備前焼	1		
		中国製青磁	3		
		中国製染付	5		
德利	備前焼	17	22		
	朝鮮製褐釉	5			
調理具	片口鉢・播鉢	東播系須恵器	54	326	326
		土師質・瓦質	77		
		備前焼	195		
貯蔵具	壺・瓶	土師質・瓦質	5	89	
		瀬戸美濃系	21		
		常滑焼	12		
		備前焼	48		
		丹波焼	1		
		信楽焼	1		
		中国製黒褐釉	1		
	甕	東播系須恵器	9	742	831
		土師質・瓦質	199		
		常滑焼	244		
		備前焼	289		
		信楽焼	1		
煮炊具	釜・鍋	土師器	1007	1046	1046
		土師質・瓦質	39		
暖房具	火鉢	土師質・瓦質	76	76	76
仏具	香炉	土師質・瓦質	27	27	27
総破片数			12333	12333	12333

※器種識別の可能なものに限る

表3 西庄Ⅱ遺跡の中世陶磁器 産地別破片数集計表

産地	種類	破片数	産地別小計
東海地方	山茶椀	3	365
	瀬戸美濃系	106	
	常滑	256	
瀬戸内地方	備前	550	550
近畿地方	東播系須恵器	63	66
	丹波・信楽	3	
輸入陶磁器	中国製白磁	68	259
	中国製青白磁	2	
	中国製青磁	133	
	中国製染付	53	
	中国製黒褐釉	1	
	朝鮮製白磁	1	
	朝鮮製褐釉	1	
	搬入品合計		

表1 西庄Ⅱ遺跡の中世土器・陶磁器 種類別破片数集計表

大分類	種類	器形	破片数	
日本土器	瓦器	椀	2914	
		皿	87	
	土師器	杯・椀	20	
		皿	6642	
		釜	1226	
		鍋	781	
		その他・不明	7	
		片口鉢・播鉢	64	
		壺	1	
	瓦質土器	甕	113	
		羽釜	26	
		足釜	2	
		鍋	2	
		火鉢	45	
		香炉	14	
		その他・不明	1	
		片口鉢・播鉢	9	
		壺	4	
		甕	86	
	土師質土器	火鉢	17	
		香炉	6	
その他・不明		1		
片口鉢・播鉢		4		
羽釜		8		
足釜		1		
火鉢		14		
香炉		7		
その他・不明		1		
土師質・瓦質土器		片口鉢・播鉢	4	
	羽釜	8		
	足釜	1		
	火鉢	14		
	香炉	7		
	その他・不明	1		
	日本陶器	東播系須恵器	片口鉢	54
			壺・甕	9
		山茶椀	椀	3
			壺	12
常滑焼		甕	244	
		播鉢	195	
備前焼		壺	48	
		甕	287	
		水屋甕	2	
		德利	17	
		建水	1	
		丹波焼	壺	1
信楽焼		甕	1	
		壺	1	
瀬戸・美濃系陶器		灰釉丸椀	7	
		灰釉平椀	2	
		灰釉皿	13	
		灰釉菊皿	1	
		灰釉卸皿	2	
		灰釉杯	1	
		灰釉盤	2	
	灰釉瓶	3		
	灰釉壺	4		
	天目茶椀	42		
	褐釉壺	14		
長石釉皿	15			
中国陶磁器	白磁	椀	21	
		皿	40	
		小杯	6	
		合子	1	
	青磁	椀	108	
		皿	22	
		盤	3	
		鉢	3	
	染付	椀	21	
		皿	26	
		盤	3	
		鉢	2	
		その他・不明	1	
青白磁	合子	2		
	黒褐釉陶器	壺	1	
朝鮮陶磁器	白磁	皿	1	
	褐釉陶器	船德利	1	
合計破片点数			13343	

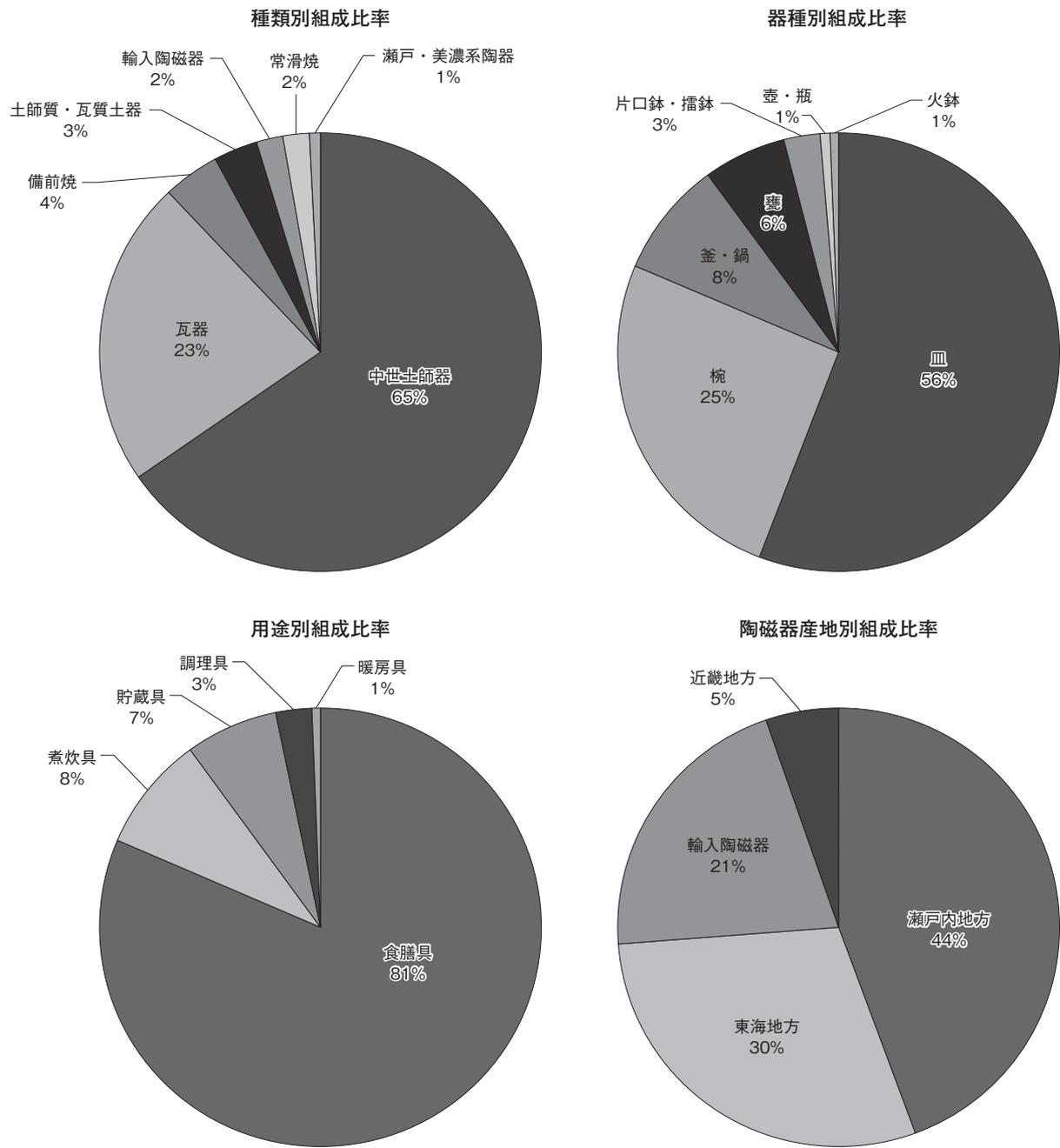


図3 西庄Ⅱ遺跡の中世土器・陶磁器破片数組成比率

比率を考える(表2)。分類は、碗・皿類と盤・鉢類などを食膳具、片口鉢・挿鉢を調理具、壺・甕類を貯蔵具、釜・鍋類を煮炊具、火鉢類を暖房具とし、前例と同様の操作を行った。その結果、用途別の破片数を比率でみた場合、値の大きい順に、食膳具八一%、煮炊具八%、貯蔵具七%、調理具三%、暖房具一%となり、用途別の組成比率は食膳具が八割の高比率を占め、他の用途のものは比率が極めて低いものとなった(図3左下)。

破片数を用いた組成比率分析の最後に、他地域から搬入されてきた陶磁器類の搬入先別、すなわち産地別に分類し、組成比率を考える(表3)。分類は、周辺域を含めて近畿地方からとみられるものに東播系須恵器六三点、丹波焼二点、信楽焼一点がある。東海地方からのものは山茶碗三点と瀬戸・美濃系陶器一〇六点、常滑焼二五六点があり、瀬戸内地方からは備前焼五五〇点、最も遠方からのものは輸入陶磁器で、中国製の白磁六八点・青白磁二点・青磁一三三点・染付五三点・褐釉陶器一点、朝鮮製は白磁一点・褐釉陶器一点があり、搬入された陶磁器の合計が一二四〇点を数える。以上の産地を明確にできた陶磁器の破片について、産地別に集計を行い、前例と同様の操作を行った。その結果、産地別の破片数を比率でみた場合、値の大きい順に、瀬戸内地方四四%、東海地方三〇%、輸入陶磁器二一%、近畿地方五%となる。以上の破片数を用いた陶磁器産地別の組成比率から、当地に搬入されてきたものは、瀬戸内地方からのものが四割強、東海地方のものが三割の高比率で、輸入陶磁器は二割強、近畿地方からのものが一割以下の組成比率を示した(図3右下)。

遺跡単独の遺物組成比率から読み取れることは、食膳具が八割の高比率を占めることである。食膳具が高比率となった原因は瓦器碗と土師器皿が大量に出土したことによるものであり(図3左上・右上)、中世の西庄Ⅱ遺跡をトータルとしてみた場合、中世前期における土器食膳具の

消費が著しいものであったという遺跡の特徴を抽出することができる。

以上、本遺跡は中世を通じた時期の土器・陶磁器類が豊富に出土していることから、恒常的な生活の場が継続的に存在したものと考えられ、この遺跡自体が一大消費地であったといえる。また、東側(東海地方)からのものと西側(瀬戸内地方)からの両方向からの陶磁器類が大量に持ち込まれていることや一定量の輸入陶磁器を所有していること、紀ノ川河口部に近く、太平洋沿岸部に近接するといった遺跡の立地と考え合わせた場合、海運を用いたとみられる流通の実体が背後に存在したと予想され、本遺跡はそれに関与した中世城館である可能性がある。

また、当地に存在した東大寺末寺崇敬寺(現奈良県桜井市安倍寺)領木本荘は十一世紀半ば頃から開発されたことと西庄Ⅱ遺跡で検出された城館の成立時期が一致すること、その後木本荘は西荘と東荘に別れ、当荘の中心が西分にあつたと推定されることなどから、西庄Ⅱ遺跡が木本荘西分(木本西荘)を経営した有力者の城館である可能性が高い。

四 中世土器・陶磁器遺物組成の遺跡間比較

西庄Ⅱ遺跡出土の遺物組成を、太田城跡のものと比較検討する。両遺跡は和歌山平野沿岸部に位置し、西庄Ⅱ遺跡は紀ノ川北岸に位置することに対して、太田城跡は南岸平野部に立地する。遺跡間の距離は、約九kmを測る。どちらの遺跡も中世を通じて営まれており、それぞれの地域での中心的な遺跡といえる(図1)。

太田城跡は、弥生時代から江戸時代にかけての長期間にわたって営まれた太田・黒田遺跡の中世での一様相として捉えられており、周囲には古代から中世後期にかけての遺跡が濃密に分布している。紀ノ川の河口から約三km遡った位置に立地しており、中世の紀伊北部における重要な河川交通及び海上交通の要衝であったといえる。中世後期には、環濠

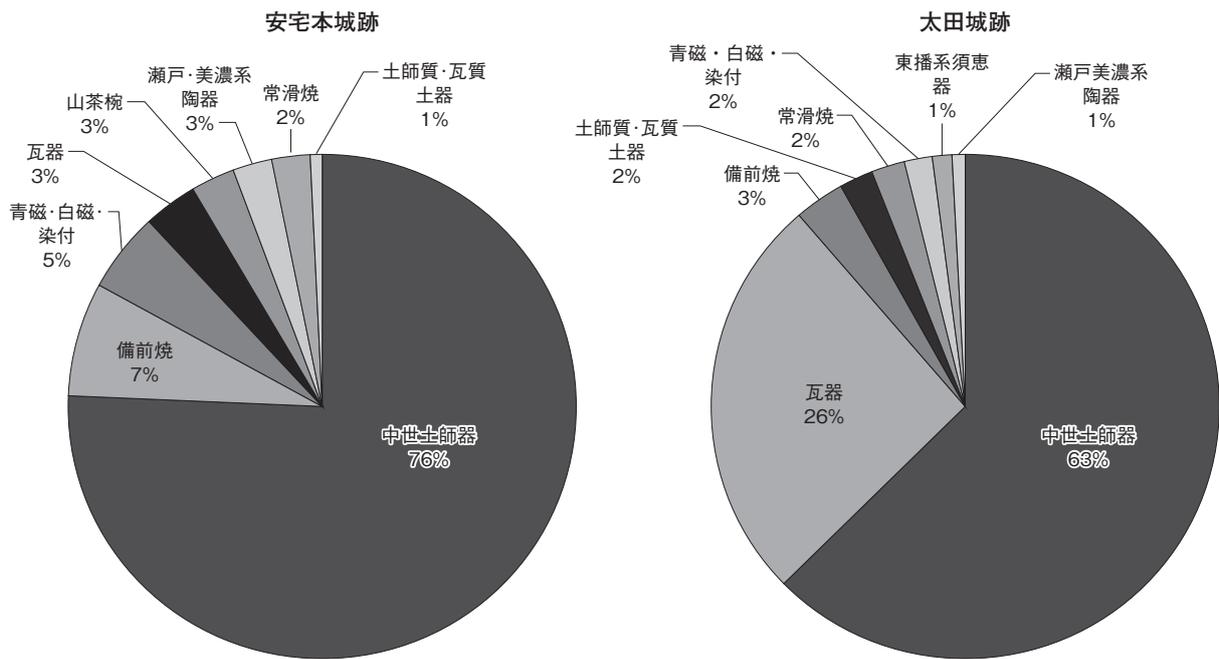


図4 太田城跡・安宅本城跡の中世土器・陶磁器破片数組成比率

(幅約一〇m、深さ二m)で東西約四五〇m、南北約三五〇mの集落範囲を楕円形に囲んでおり、北側及び西側が二重環濠であったと復元することができ、その姿が太田城跡と考えられている¹⁵⁾。

天正十三年(一五八五)三月、秀吉は紀州を攻め、根来寺・粉河寺を焼亡させ、雑賀を占領したが、この時の雑賀惣国最後の抵抗拠点が太田城であった。秀吉は巨大な堤を築き、紀ノ川から水を引き入れ、太田城を水攻めにした。太田城は約一ヶ月の後、落城したとされる¹⁶⁾。

太田城跡の遺物組成比率の検討は、第二次調査検出の中世後期の大溝出土遺物を対象とした。これを選択した理由は、十六世紀後半に人為的に埋め戻された遺構であること、埋め戻しに際し周囲に存在した遺物が不作為に包含されるとみられ、遺跡中心部における遺物組成を反映した遺物群であると考えられたからである¹⁷⁾。

遺物組成を検討した遺物の時期は、十一世紀後半から十六世紀末に至る中世の時期を対象とし、その時期の土器・陶磁器を抽出し、種類別破片数集計を行ったものである。

中世土器・陶磁器の総破片数は一六八九点を数えた。種類の内訳は、中世土器一〇五六点、瓦器四三九点、山茶椀一点、東播系須恵器二一点、土師質・瓦質土器三六六點、瀬戸・美濃系陶器一四四點、常滑焼三六六點、備前焼五四点、信楽焼二点、中国製の輸入陶磁器三〇点(白磁二二点、青白磁二点、青磁一点、染付五点)である。

種類別の破片数を比率でみた場合、値の大きい順に、中世土器六三%、瓦器二六%、備前焼三%、土師質・瓦質土器二%、常滑焼二%、中国製陶磁器は青磁・白磁・染付を合わせて二%、東播系須恵器一%、瀬戸・美濃系陶器一%となる。山茶椀一点は比率には顔を出さないが、一点でも存在することが重要である。以上、種類別の組成比率は中世土器が六割強、瓦器が四分の一強の高比率であり、この二種で全土器の九割を占める結果となった(図4右)。

西庄Ⅱ遺跡出土の中世土器・陶磁器の種類別破片数組成比率を太田城跡のものと比較する。中世土師器は、西庄Ⅱ遺跡六五%と太田城跡六三%、同瓦器二三%と二六%で組成比率の上位一・二位が近似した値を示し、この上位二種類で約九割を占める点が極めて近似している。また、上位三位は備前焼、同四位が土師質・瓦質土器である点も同様である。

それ以下の順位は異なるが、中国製陶磁器、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器は一〇二%の少ない比率であることが共通している。なお、比率は一〇前後であるが東播系須恵器もそれぞれ一定量あり、比率には顔を出さないが西庄Ⅱ遺跡に山茶椀三点、太田城跡に同一点と僅か数点ではあるが出土している点も共通点にあげられる。

以上、両遺跡の中世土器・陶磁器の種類別破片数組成比率は極めて近似したものといえ、中世を通じた時期の和歌山平野における城館遺跡共通の土器・陶磁器の種類組成を示している可能性がある。

次に、近似した条件を持つ安宅本城跡と比較する。安宅本城跡は紀伊半島南西沿岸部に位置する中世の城館跡であり、西庄Ⅱ遺跡とは直線距離で約八〇kmを隔てた遺跡である。遺跡は日置川の河口から約三km遡った日置川左岸の平野部に位置する。中世の熊野水軍の一派・安宅氏の本拠地と考えられている遺跡である。発掘調査の結果、出土遺物の主体は中世であるが、弥生時代から江戸時代までの遺物が出土し、長期間に渡って営まれた集落の複合遺跡であることが判明した¹⁸⁾。

安宅本城跡は、これまで五次数に渡って発掘調査が行われており、遺物組成を比較する場合、出土遺物の総破片数が多いほど安定した比率を示すと考えられることから、第一次から第五次調査までを合算した数値処理を行った。十一世紀後半から十六世紀末に至る時期の土器・陶磁器を抽出して作成した結果、その時期の総破片数は三〇五〇点を数えた(本書三二二頁・佐藤報告表1参照)。

種類の内訳は、中世土師器二二九九点、瓦器一〇四点、山茶椀八五

点、東播系須恵器六点、土師質・瓦質土器二三点、瀬戸・美濃系陶器七六点、常滑焼七四点、備前焼二二二点、中国製輸入陶磁器一五五(白磁五〇点、青磁五八点、染付四七点)である。その他、中国南部産の可能性のある黒褐釉陶器三点と朝鮮製褐釉陶器一点、産地不明陶器二点がある。

種類別の破片数を比率でみた場合、値の大きい順に、中世土師器七六%、備前焼七%、中国製陶磁器(青磁二%・白磁二%・染付一%)五%、瓦器三%、山茶椀三%、瀬戸・美濃系陶器三%、常滑焼二%、土師質・瓦質土器一%、となる(図4左)。なお、比率には顔を出さないが東播系須恵器が六点出土していることも重要である。

以上、種類別の組成比率は中世土師器が四分の三と最も高比率で、二位の備前焼七%と三位の中国製陶磁器五%は近似した比率といえ、合わせて七分の一を占め、この上位三種で全土器の九割を占める結果となった。なお、山茶椀と瓦器が、どちらも三%と同じ比率である。これは中世前期の食膳具が東西からの搬入において拮抗していることを示している。

西庄Ⅱ遺跡出土の中世土器・陶磁器の種類別破片数組成比率を安宅本城跡のものと比較する。中世土師器は西庄Ⅱ遺跡六五%、安宅本城跡七六%で、どちらも組成比率の一位である点は共通するが、安宅本城跡の比率がやや高い。西庄Ⅱ遺跡の瓦器は二三%であるが、安宅本城跡は僅か三%で西庄Ⅱ遺跡が優勢である。備前焼は西庄Ⅱ遺跡四%、安宅本城跡七%、中国製陶磁器は西庄Ⅱ遺跡二%、安宅本城跡五%でどちらも安宅本城跡が優勢である。常滑焼はどちらも二%で同じ比率を占めるが、瀬戸・美濃系陶器は西庄Ⅱ遺跡一%、安宅本城跡三%で安宅本城跡が優勢である。土師質・瓦質土器は西庄Ⅱ遺跡三%、安宅本城跡一%で西庄Ⅱ遺跡が優勢である。なお、山茶椀は安宅本城跡三%に対して西庄Ⅱ遺跡は一%に満たない僅か三点の出土であることから、安宅本城跡が圧倒的

に優勢といえる。また、東播系須恵器は西庄Ⅱ遺跡で六三点出土しており一％に僅かに満たないため比率には表れないが、安宅本城跡では僅か六点であることから西庄Ⅱ遺跡が優勢であるといえる。

広域流通品とみられる土器・陶磁器の所属時期を考えた場合、中世前期のものは瓦器、山茶椀、東播系須恵器、中世後期に主体のあるものは備前焼と土師質・瓦質土器である。中世全般にみられるものは、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器、中国製陶磁器がある。

中世前期に限って見た場合、西庄Ⅱ遺跡は瓦器と東播系須恵器が優勢で、安宅本城跡は山茶椀が優勢である。これは生産地からの距離の遠近と輸送費コストによるものと考えられ、生産地に近いほど安価に入手できた結果と理解できる。瀬戸・美濃系陶器の安宅本城跡優勢もこれと同様の理由によるとみられる。

常滑焼は両遺跡とも同じ比率を示すが、生産地からの距離を考えると西庄Ⅱ遺跡が積極的に入手していた可能性がある。

中世後期では、西庄Ⅱ遺跡は土師質・瓦質土器が優勢で、安宅本城跡は備前焼が優勢である。土師質・瓦質土器は生産地に近いため西庄Ⅱ遺跡が優勢であると説明できるが、安宅本城跡で備前焼が優勢なことは生産地との距離の遠近で説明がつかない。安宅氏が水軍領主として海運に積極的に関わり集積した、もしくは消費地として積極的に購入したなどの理由が考えられる。中国製陶磁器の安宅本城跡優勢もこれと同様の理由とみられる。

紀伊半島南東沿岸部で発掘調査が行われた中世城館跡として川関遺跡がある。遺跡は、熊野三山の一つ那智山の入口部分にあたる那智川河口から〇・五km遡った、標高四mの狭い平野部に位置する。

川関遺跡の出土遺物は十一世紀前半から十七世紀前半までの、古代末から江戸時代初頭の長期間に渡る多種多様なものが報告されている^②。西庄Ⅱ遺跡など同一条件での比較を試みるため、中世（十一世紀後半か

ら十六世紀末）の土器・陶磁器を抽出し、種類の比較を試みる。

川関遺跡の中世土器・陶磁器は、瓦器、中世土師器（皿が主体であるが、煮炊具では畿内系・南伊勢系・播磨系がある）、瓦質土器、山茶椀、東播系須恵器、常滑焼、備前焼、伊賀・信楽焼、瀬戸・美濃系陶器、中国製・朝鮮製・東南アジア製陶磁器などがある。なお、食膳具に漆器、煮炊具に石鍋と鉄製鍋・釜・五徳の出土が報告されている。

川関遺跡の出土遺物破片数は未公表であるため、発掘調査報告書に掲載された記述と遺物実測図の分量などを参考に検討を行う。

西庄Ⅱ遺跡や安宅本城跡と比較した場合、両遺跡にみられる土師質土器の出土が無く、搬入され無かったといえる。また、西庄Ⅱ遺跡や安宅本城跡と比較して山茶椀の出土量が多く、生産地との距離の遠近で説明できる。また、南伊勢系土師器鍋も多く、同様の理由が考えられる。なお、瓦器、播磨系土師器鍋、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、伊賀・信楽焼、中国製・朝鮮製・東南アジア製陶磁器など、西側からの広域流通品が一定量出土している点に特徴がみられる。また、古代末から江戸時代初頭まで長期間に渡って営まれていたことなどからも、本遺跡は当地域の中心的な遺跡であると評価できる。

以上、西庄Ⅱ遺跡出土の遺物組成を、太田城跡、安宅本城跡、川関遺跡と比較検討した。これらの遺跡は、十一世紀後半から十六世紀末の中世を通じて長期間に渡って営まれた遺跡である点が共通しており、それぞれの地域での中心的な城館であったといえる。

おわりに

今回の資料報告において、西庄Ⅱ遺跡出土の中世土器・陶磁器の遺物組成を報告し、他の城館遺跡との比較検討を試みた。

西庄Ⅱ遺跡と太田城跡の遺物種類組成比率の比較検討から、遺物組成

の内容が極めて近似していることが判明した。このことは中世を通じた時期の和歌山平野における城館遺跡共通の土器・陶磁器の種類組成を示した可能性があるといえる。

安宅本城跡との比較検討の結果、広域流通品とみられる土器・陶磁器は、中世前期では生産地からの距離の遠近と輸送費コストが組成比率に反映すると考えられ、生産地に近い遺跡の組成比率が優勢となる結果となった。中世後期では、同様の理由で説明できるものもあるが、備前焼や中国製陶磁器など生産地との距離の遠近で説明がつかない比率を示すものがあり、海運に積極的に関わり集積した、もしくは消費地として積極的に購入したなどの理由を推定した。

なお、山茶碗の和歌山平野の城館遺跡からの出土は僅少であるが、僅か数点でも出土している事実は重要であり、数の少なさは商品としての流通などでは無く、東海地方からの人の往来を示す遺物である可能性がある。

また、紀伊半島南西沿岸部に位置する安宅本城跡の食膳具である山茶碗と瓦器が、どちらも三%と同じ比率である。これは中世前期の食膳具について、東からの山茶碗と西からの瓦器の搬入が拮抗していることを示している。言い換えるならば、紀伊半島南西沿岸部の日置川下流域周辺が山茶碗と瓦器の面的分布範囲が重複し拮抗する地域であると推定できる。それとは逆に、紀伊半島南東沿岸部に位置する川関遺跡では山茶碗が多く出土しており、瓦器に対して優勢とみられる。これは生産地により近い遺跡が優勢となる組成比率を示したものと考えられる。

本報告にあたっては、和歌山県教育委員会の田中元浩氏、紀伊風土記の丘資料館の金澤舞氏に、資料の閲覧・計数をはじめ、さまざまな便宜を図っていただいた。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

注

- (1) 北野隆亮 二〇一九「発掘調査から見た和歌山平野の中世城館」『文献・考古・縄張りから探る 近畿の城郭』中井均監修・城郭談話会編 戎光祥出版 図1は、本文献から引用した。
- (2) 北野隆亮 二〇〇六「太田城跡」周辺の考古学的考察『和歌山平野における荘園遺跡の復元研究—中世日前宮領の研究—』(平成15)17年度科学研究費補助金研究成果報告書 海津一朗編
- (3) 日本貿易陶磁研究会 一九八四『貿易陶磁研究』第4号 本研究誌上において特集「日本各地の遺跡における陶磁器の組成と機能分担」が生まれ、中世遺跡から出土した土器・陶磁器の種類毎の破片数を集計し、組成比率を検討する研究が全国規模で行われた。この研究において、小野正敏氏は、遺跡間の遺物組成を比較することは有効であり、畿内周辺、東北・北海道、琉球と大きく三グループに分かれることをあきらかにした。また、組成研究は遺跡単位以外に、都市や町、井戸や溝などの遺構単位など様々なランクで設定が可能としつつも、その特徴が所属遺構本来の機能や使用時の遺物の組合せだけを示すとは限らないので、比較する条件等を一定にするなどの注意が必要であると指摘している。
- (4) 辻林浩 一九九四「検出遺構からみた西庄Ⅱ遺跡について」『和歌山県史 中世』和歌山県史編纂委員会
- (5) 西庄Ⅱ遺跡の出土遺物は、和歌山県教育委員会の遺物整理台帳で管理されており、調査地区・第ⅠⅤⅢ区の全ての遺物はコンテナで一六〇箱が登録されている。調査は、中世城館の遺構が検出された第Ⅰ区出土の中世土器・陶磁器八八箱を選択・抽出して実施した。また、遺物整理台帳作成前に資料の一部が抽出され、和歌山県立紀伊風土記の丘及び和歌山県立博物館において展示・保管されており、これらについても別に調査を行い、計数に加えた。
- (6) 和歌山県教育委員会 二〇〇七『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』
- (7) 角川書店 一九八五『角川日本地名大辞典 和歌山県』
- (8) 高橋修 二〇〇〇『中世武士団と地域社会』清文堂出版
- (9) 小林保夫 一九九一「南北朝内乱期の和歌山」『和歌山市史』第一巻

和歌山市史編纂委員会

- (10) 矢田俊文 二〇〇二『日本中世戦国期の地域と民衆』清文堂出版
- (11) 図2は、注4文献から引用した。
- (12) 北野隆亮 二〇一八「西庄Ⅱ遺跡」『図解 近畿の城郭Ⅴ』戎光祥出版
- (13) 今回の調査では中世土器・陶磁器を抽出したが、発掘調査においては、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、近世土器・陶磁器、瓦、土錘などの土製品、石鏃などの石器、砥石や滑石製石鍋、茶臼や五輪塔部材などの石製品、鉄製角釘・刀子や銅製金具などの金属製品、漆器・杭などの木製品、種子・貝などの自然遺物、焼土化した壁土など、弥生時代から長期間に渡る多種多様な遺物が出土している。
- (14) 調査は、和歌山県遺物収蔵庫（紀の川市）、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館、和歌山県立博物館において実施した。コンテナ1箱につき遺物登録台帳1枚を作成し、中世土器・陶磁器等を分類し、種類毎の破片数を記入した。作業は北野が行った他、坂本亮太・佐藤純一が協力して実施した。遺物登録台帳作成後に集計作業を行い、表1-3・図3を作成した。
- (15) 北野隆亮 二〇〇八「太田城跡の考古学史と景観復元」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第29号 和歌山大学、北野隆亮 二〇一五「太田城跡の環濠復元」『太田・黒田遺跡第75次発掘調査報告書』公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団
- (16) 三尾 功 一九九一「秀吉の紀州攻め」『和歌山市史』第一巻 和歌山市史編纂委員会
- (17) 注2文献と同じ 図4右の円グラフは注2文献から引用した。
- (18) 北野隆亮 二〇〇五「遺物組成からみた安宅本城跡」『日置川町史 第一巻 中世編』日置川町史編さん委員会
- (19) 白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭群発掘調査委員会 二〇一四『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』、白浜町教育委員会 二〇一九『安宅荘中世城郭群総合調査報告書 補遺編』 図4左の円グラフは本書三二二頁・佐藤報告表1をもとに作成した。
- (20) 財団法人和歌山県文化財センター 二〇〇四『藤倉城跡・川関遺跡